

令和元年度 社会を明るくする運動 最優秀・優秀作品の紹介



7月は『社会を明るくする運動』強調月間でした。この運動の一環として、児童・生徒の皆さんから作文を募集したところ、多くの作品が寄せられました。

厳正な審査を行い、受賞作品が決定しましたので、最優秀・優秀賞を受賞した作品を紹介します。

(最優秀賞のみ全文掲載)

最優秀賞 小学校の部

「広げよう思いやりの気持ち」 綾木小学校 6年 北村 悠生

社会を明るくし、犯罪や非行が起きない社会をつくるには、思いやりが必要だとぼくは思います。

朝登校する時、集合場所には必ず見守り隊の方が待ってくださっています。これは、見守り隊の方の思いやりです。そして、児童みんなで支え合いながら学校に登校しています。支え合うことも思いやりです。毎月十日は、美東の日と言って、あいさつ運動をしています。みんな大きな声で、たくさんの人にあいさつをしています。ぼくもあいさつをする時は、相手の人を気持ち良くするために、明るくすることをイメージしています。

世の中には、犯罪をしてしまう人がいます。犯罪をしてしまう人は、本当はみんなと仲良くなりたいたいという思いがあると思います。ぼくは、一人でも多くの人と接することによって、新しい気持ち、感情が生まれるんじゃないかなと思いました。そんな気持ちが少しでもあると考えがマイナスな考えでなくてプラスな考えになると思います。

ぼくは、小五の時に、見知らぬ人に声をかけられたことがあります。そんな時、「こんにちは」と大きな声であいさつをしました。すると、その人はうれしそうな顔をして立ち去って行きました。「おはよう」「こんにちは」「こんばんは」この言葉は、まほうのようです。その一言で心がつながり、そしてそれが続けば、この世界から戦争が少しでも減っていくと思います。

犯罪を犯す人は、何か強い思いをもっていると思います。その思いを分かってあげる人がいれば、または、わかち合うことができれば、犯罪を犯す人は減ると思います。ぼくはよく「気をつけて」と言われます。これにはたくさんの意味があります。その一つに、相手を意識して良い気を送る意味もあります。

犯罪は、少しずつ減ってきています。それは、声かけをする人が増えたおかげだと思います。何より、あいさつは、人と人をつなぐかざりだと思います。あいさつをされた人は、うれしい気持ちになります。ぼくたちの地域のようにあいさつ運動をすることが、思いやりの気持ちを広げるかざりです。

犯罪や非行がなくなることによって、社会が明るくなっていくと思います。ぼくは、今までたくさんの人たちに支えられて生きてきました。犯罪や非行に走る子は、こういった支えがたりないのだと思います。声かけやあいさつも支えになります。ぼくも、まず「あいさつ」から始め、社会を明るくしていこうと思います。

優秀賞

小学校の部

麦川小学校 6年
岩坂 渚
『考えた事』

大嶺小学校 6年
中野 希咲
『犯罪、非行をなくしていこう』

中学校の部

於福中学校 3年
河内 未羽
『私にできること』

伊佐中学校 1年
西山 昇汰
『迷惑をかけるということについて』

最優秀賞 中学校の部

「今日の前にいる人は世界で一番大切な人」 伊佐中学校 3年 吉田 遥

私は、毎日のようにテレビで悲惨なニュースや残酷なニュースを目にします。そのたび私は胸が締めつけられたり、腹が立ったりすることがあります。中でも、私が一番嫌になったのは、犯罪を犯してしまった人が

「だれでもよかった。」

と言っているところです。私は、正直、

「どうして、あなたの勝手な判断で人の命が奪われないといけないの！」

「だれでもよかったのなら、なぜ自分ではなく他人なの！」と、怒りと問いで頭がいっぱいになっていました。そして、すべて加害者、犯罪者が悪いと思いついで、犯罪を犯してしまった人の秘められた想いを考えようとも、理解しようとも思っていませんでした。

しかし、そんな私の問いを聞いてくれた親の話や、美祢市にある社会復帰促進センターについての話をくださった先生の話聞くうちに、犯罪を犯してしまった人にも、辛い過去や犯してしまった理由があるということに気がつきました。ある人は、犯罪に手を染めてしまう前、家族、友達、関わった人たちから多くの不評を受け、だれ一人信じてくれる人がいなくて、一人ぼっちになり、その悲しみや辛さが心に悪い影響を与え、犯罪を犯してしまったそうです。

その話を聞いて、もう一つ大事なことに気がつきました。それは、すべて犯罪を犯してしまった人が悪いのではなく、その人に関わってきた人たちにも責任があるということです。しかし、この意見には、

「他の人は関係ない。どんな理由があれ、犯罪を犯してしまった本人が悪い。」

という反対意見がある人が多いでしょう。けれど、私はそうは思いません。もちろん、犯罪を犯すということは、人として絶対にやってはいけないことであり、その人を庇うつもりもありません。しかし、一人でもその人と向き合い、正面からぶつかっていれば、もしかしたら犯罪が一つ減っていたかもしれないということが言いたいのです。

私は昔、私にとってとても嫌だと思ふことをされて、何度も何度も「やり返してやる」という暗い思いに染まっていた時期がありました。でも、ある日、そんな思いに染まった私の表情に気がついてくれた父から、

「今、目の前にいる人は世界で一番大切な人なんだよ。」

という言葉が教わりました。それから私は、どんなに嫌だと思っても、目の前の人は大切な人なんだ、その人の良いところを探してみようという考えに変わっていきました。そのおかげで、今、私は毎日がとても幸せです。

私たち人間は、たった一つの言動で人生を変える力を持っています。よい方向にも悪い方向にもです。それを理解し、忘れず、責任をもって行動しなければならないと思います。そして、学んでいかなければいけません。

私は、「更生保護」という活動が行われていることを、中学三年生になって初めて知りました。今まで私は、犯罪を犯してしまった人は、一生「犯罪」という重い荷物を背負って生きていかなければならないと思っていました。しかし、今の日本には、犯罪を犯してしまった人の立ち直りを支えようという「更生保護」という活動があり、その施設が山口県にもあるとのことでした。このような活動をしている人たちのことを知ったとき、自分がとても情けない気持ちになりました。犯罪を犯した人を支えようという考えの人がいる一方で、私は何ができるかなど考えたこともなく、犯罪を犯してしまった人に明るい将来はないと勝手に思い込んでいたからです。私のような考えをもった人がいるから、犯罪を犯してしまった人は立ち直れず、また犯罪を犯してしまうということにつながり、この世界から犯罪が絶えない一つの理由になっているのだと気づかされました。

私がそうだったように、「更生保護」について知らない人を減らしていけば、もっともっと明るい社会に変化していくのではないかと思います。だから、もっともっとたくさんの人に「更生保護」ということについて知ってもらいたいと思います。小さなことですが私ができることとして、学校でも知ってもらえるように呼びかけてみたいです。

そして、私の座右の銘でもある「今日の前にいる人は世界で一番大切な人」という言葉をたくさんの人に贈りたいです。なぜなら、この言葉のおかげで私自身、変わることができたからです。だから、今、辛い思いや嫌な思いをしている人、その周りの人、人と関わるすべての人に「一人ひとりが大切な人なんだ」という考え方や知識をもってもらいたいと思います。どうか犯罪がなくなり、みんなが幸せな、明るい社会になりますように。